



糸谷哲郎さんに聞く

学生にして将棋のプロ棋士。昨年12月に「竜王」に就任して注目度も高くなった。厳しいプロの世界に身を置きながら、阪大生として勉学に勤しむ糸谷哲郎さんにインタビューしました。

(注) 本記事は、竜王戦第5局を控えた11月27日に、豊中キャンパスで取材したものです。

●糸谷哲郎 (いとだに てつろう)
1998 年日本将棋連盟・新進棋士奨励会入り。2006 年 17 歳でプロ棋士になる。森信雄門下。06 年度新人王戦優勝、新人賞・連勝賞受賞。07 年大阪大学文学部入学。11 年より同文学研究科在籍。14 年竜王挑戦権獲得と同時に七段に昇段。同年、竜王位獲得により八段に昇段。

勉学について

——大学院ではどんな研究を？

ハイデッガーの研究を行っています。人間の日常行動、思考がどのように決まるのか、人工知能、動物では見られない人間ならではの行動を比較研究する。例えば、何が食べたいかを人が考えるとき、瞬間の欲求にも影響されるが、人のバックグラウンドであるその人が過ごしてきた背景が影響しています。

——哲学への興味はいつごろから？

祖父(マルクス経済学者)がニーチェやアリストテレスを研究していたので、その影響があります。中学生のころから興味を持ち、政治系の思想書を読んでいた。方向性を固めたのは大学に入ってから。

——大学研究室には？

ゼミは10名程度。研究室で話したりすることで(将棋を離れて)気分転換にもなっている。阪大の中では、研究室で過ごした時間が最も長いです。

——棋士と大学院生の両立は大変では？

いくつものことを並行して行っている方が緊張感が絶えないので自分には良いと思う。ただ、棋士としてタイトル戦やイベント関係で忙しくなってきたので、最近ではなかなか勉強の時間が取れない。大学に行くからには自分の中で納得できるまで勉強したい。そう考えているので大学院にも進んだ。これからもその考えは変わらないと思います。

日々の生活について

——普段の生活は？

今は家と関西将棋会館の往復の日常。食事也将棋会館の近くで済ますことが多い。学部1〜2年のころは自分でパスタを作って食べていた。3年になって、さすがにパスタばかりだと飽きてきた(笑)。

——他の学生と違う点は？

(アルバイトをしたり、飲み会にいたり、サークルに入ったりという普通の学生の感覚と) 特別違うと思ったことはない。

——ロックをよく聴くとか？

母がピアノ教室をやっており、クラシックを毎日聞いていた反動からだと思う(笑)。 アジカンとかバンブとかをよく聞く。

——睡眠時間は？

1日平均3、4時間くらい。寝なくても平気な方です。寝貯めすることはありますが。

——読書は？

いろいろ読みます。1時間で300ページくらいは読んでしまうので。



将棋について

——将棋を始めたのはいつから？

5歳の時にニュースで「将棋」という単語を聞き、興味を持ち、父に尋ねて知った。広島将棋センターで道場に通った。奨励会には、9歳の時に試験を受けてギリギリだったが合格できた(1回で合格)。

——家でも将棋盤を出して指す？

最近では、パソコンで棋譜を見ることが多くなりました。

——両親の反応は？

両親も大学に通っていること、将棋をしていることに喜んでくれていると思う。

——「糸谷ウォーク」って知っている？

(将棋雑誌などで、「糸谷ウォーク」という言葉も出てくるほど、糸谷さんがよく歩くことに注目が集まっている) そうなんですか(笑)(歩くことは)特に意識してないですね。歩いた方が、脳にはいいというのはあるので、歩くようにしている、というのはあります。大学の構内を歩いている時も、答えの出ていない局面を思い描くことはありますね。

——街で声かけられたりする？

大阪ではなかなかないが、(出身地の) 広島に帰ると声をかけられることもある。メールとかLINEで友人とやり取りするので、そこで「おめでとう」とか連絡をくれる人もいます。

大阪大学について

——大阪大学の良いところは？

いろんな哲学が学びやすいところだと思う。贅沢に学べるところ。分析系の哲学(カント、カーナップ、クワインなど)と大陸系の哲学(ニーチェ、ハイデッガーなど)といった枠組みを超えて自由に学べた。臨床哲学の対話の授業も面白かった。

——後輩に向けてメッセージを。

せっかく大学に来ているのだから、得心いくまで学んでほしい。大学を卒業して就職してから悩む人が多いので。

最後に

——座右の銘は？

「振猛」。「勇氣(猛)は振るうべき時に振るえ」という意味です。

——次局に向けて意気込みを。

前局は内容がよくなかったので、きれいな将棋を指したいですね。まだ7戦までの挑戦権を得ただけなので。気を抜くと一気にやられるので。次も頑張ります。

—インタビューを終えて—

どんな学生かと構えましたが、話をしてもごく普通の学生の印象でした。素直な受け答えの中にもどこか凛としたたずまいを持っているところは、長年将棋と向き合ってきた品格なのでしょう。緊張もせず、いつも自然体でいられるところが彼の天性の才能だと思います。「哲学のことを話し出したら止まらないですよ」と聞いて、この先も阪大で専門を磨き、将棋でも大輪の花を咲かせてほしいです。(インタビュー：広報・社会学連携オフィス・松本紀文 写真撮影：毎日新聞社)

昨年12月22日(月)、糸谷さんが平野俊夫総長を表敬し、タイトル獲得の報告をしました。

二人は哲学のこと、学業と将棋の両立、集中力維持の秘訣などを語り合いました。平野総長から記念の色紙と阪大の襟章を贈呈され、糸谷さんも色紙と著書「現代将棋の思想」を平野総長に手渡しました。

懇談の記事は大阪大学ニューズレター 67 号に掲載します。

